

学校関係者評価委員会 議事録

1. 開催日時：2023年6月13日（火）14：00～15：00

2. 出席者：【学校法人明星学園 国際医療専門学校 学校関係者評価委員会】

委員長 城戸 秀美 （埼玉精神神経センター 看護部長）

副委員長 上山 悦代 （元浦和学院専門学校 副校長代理）

委員 小袋 伸枝 （浦和学院高等学校 副校長）

委員 石井 悠太 （本校卒業生、埼玉セントラル病院 看護師）

書面出席：委員 関 彩嘉 （本校卒業生、国立病院機構埼玉病院 看護師）

【学校法人明星学園 国際医療専門学校 自己評価委員会】

委員長 遠藤 貞子 （学校長）

副委員長 石橋 佳朋 （副校長）

委員 中安 ゆかり （看護学科 学科長）

委員 安田 富子 （臨床検査学科 学科長）

委員 黒川 由美子 （看護学科 副学科長）

委員 伊藤 恵子 （臨床検査学科 副学科長）

委員 伊藤 隆志 （臨床検査学科 副学科長）

委員 宮田 浩 （臨床検査学科 教員）

委員 渡邊 展良 （事務長）

委員 遠山 卓 （事務次長）

委員 塩田 雅子 （事務主任）

欠席者：委員 大出 幸子 （看護学科 実習調整者）

3. 開催場所：国際医療専門学校 2号館 2階セミナー室

以下の出席者は、Web会議システム「Zoom ミーティング」により参加。

委員 小袋 伸枝 （浦和学院高等学校）

4. 議事次第：1) 校長挨拶及び会議成立について

2) 学校関係者評価委員会委員長挨拶

3) 教職員紹介

4) 学校関係者評価委員紹介

5) 令和4年度自己点検自己評価実施内容の結果報告（資料添付）

6) 学校関係者評価委員からの質疑応答、評価

7) 総括

5. 配付資料：令和4年度国際医療専門学校 自己点検自己評価まとめ（事前配布）

6. 議事内容

1) 校長挨拶及び会議成立について

遠藤校長より出席された委員の皆様への御礼とともに 2/3 以上にあたる学校関係者委員の出席により、委員会の成立を宣言した。

本学は、学校関係者評価委員の皆様には評価をしていただくことで、本学の教育水準の維持と常に質の高い医療職の養成を行っている。学校関係者評価委員の方々による教育のあり様についての学校のあるべき姿を導いていただきたく、忌憚のない意見をお願いする。

2) 学校関係者評価委員会委員長挨拶

看護師、臨床検査技師の養成校として質の高い医療職を養成していく責任と義務を果たすべく自己点検、自己評価をすることで教育理念のもと教育目的達成のため日々努力されていると思う。外部環境として政令指定都市であるさいたま市は、2023年5月現在人口134万2207人、世帯数63万6516人といずれも増加傾向にある。また、人口構成は14才以下の人口17万1611人、65才以上の人口31万1084人、その差は13万9473人である。高齢化に伴い国内では2025年に高齢者の世帯が1千840万世帯を超え、70%が一人暮らし若しくは高齢者のみの世帯となる。また高齢者の20%が認知症と推移している。

このような現状を踏まえ医療提供者の教育は重要課題である。国際医療専門学校の教育に微力ながら関わることが幸いである。評価委員会が今後の教育に活用されることを願っている。

3) 教職員紹介

司会の渡邊事務長より教職員の紹介を行った。

4) 学校関係者評価委員紹介

学校関係者評価委員が自己紹介を行った。

5) 令和4年度自己点検自己評価実施内容の結果報告（資料添付）

遠藤校長・石橋副校長・中安学科長・安田学科長・渡邊事務長・遠山事務次長から〔I. 学校経営〕〔II. 教育課程・教育活動〕〔III. 入学・卒業対策〕〔IV. 学生生活への支援〕〔V. 管理運営・財政〕〔VI. 施設設備〕〔VII. 教職員の育成〕〔VIII. 広報・地域活動〕の8つの自己評価項目の結果についての報告を行った。

看護学科 〔I. 学校経営〕前年度と同じ評価、その他の項目は前年度の評価を上回った。

臨床検査学科 今年度が初めての評価となる。

6) 質疑応答、評価

城戸委員長

教育課程・教育活動について

看護学科 2 年生からパソコンを用いて記述しているが、コピーし貼り付けをしている学生はいるかとの質問があり、中安学科長よりレポートに関してはない。日々の行動計画について前日と同じスケジュールや観察項目を記述する時には良い。実習記録に時間がかかり過ぎ睡眠不足などで精神的に病んでしまい、実習に参加できないことが危惧され記録に荷重がかかってしまう。看護過程に関して、他から持ってくるのではなく自分が書き込んだものの貼り付けのため大きな問題は生じていない。と回答した。

入学・卒業対策について

現在、看護学科は定員割れが多い中頑張っていることは評価すべきことである。

今後は年齢の制限等は考えているのかとの質問があり、渡邊事務長より今現在年齢制限はないと回答した。

国家試験合格率で学校を選ぶこともある。3 年連続看護師国家試験 100%合格は評価すべきことである。今後も 100%合格を継続し、ホームページ等でアピールし、学生確保につなげていきたい。

学生生活への支援について

- ・メンタル面で長期休学している学生はいるかとの質問があり、中安学科長より長期休学している学生がいる。入学前からのベースがあり、入学試験では見抜けないことがあると回答した。

休学期間が長くなればなるほど復学が難しい。今後もサポートしていただきたい。

- ・学生意見箱はいつ誰が回収し、どのような方法で学生に回答し可視化しているのかとの質問があり、遠山事務次長より毎週月曜日朝回収し、意見がある場合はその日の朝礼で執行部にて共有し対応を検討する。看護学科、臨床検査学科それぞれのモニター掲示板で回答していると回答した。

上山副委員長

学校経営について

- ・両学科とも大変な状況であったと思うが教職員の方々がこのような評価をしたということは今が充実し、これからも充実していきたいということだと思う。先生方の努力に敬意を表する。
- ・管理職のリーダーシップは大事なこと。朝礼を行うことは教職員が迷わず、学生を育てるために良いことである。

教育課程・教育活動について

- ・ICT教育の実施は臨床に直結している。学校の基礎教育と卒業後の乖離が減っており、ICT能力を基礎教育から教育され、教材の活用は大事である。
- ・カリキュラム改正については1年生が2年生に上がった時、看護技術能力を高める。
看護師にとって知識も大事だが安全安心な技術を提供することが大事である。
- ・パソコンの導入については守秘義務を守り、学生が記録攻めにならず、患者さんにとって必要ものは何か的確に考えられるような手だてとなるよう大事な部分である。
- ・アクティブラーニングで意見を述べられているような環境で授業がされている。看護師は医師の補助をしているわけではない。責任を持って患者さんの安全で安心な療養生活、日常生活を送れるような知識、技術、態度などを育成されるのではないか。
- ・80名が如何に競い合うか、80名の実習室を効果的に使用することが大事。人数が多い環境で技術演習ができるのは良い効果が出ると思う。
- ・臨床検査学科は年2回講師会を開催している。専修学校は非常勤講師で成り立っている。講師と教員との連携が密にされており感心した。看護学科も非常勤講師との意見交換をするのも一つの考え方である。
- ・スタンダードプリコーションを看護学科にしてもらったが、カリキュラムにどのように入れコラボするか、もっと密に行ってよい。広報活動に生きてくる。他に類を見ないことをやっているのでアピールし、今後も内容を増やすとよい。

入学・卒業対策

学校法人で看護師国家試験国試100%合格は難しい。教員が学生を実習病院に引率し、学生も教員も学び、記録物を変えることに協力していただき学校への信頼がある。

看護師長、指導者と話ができる環境が整った結果3年連続看護師国家試験100%合格につながった。1年生から国家試験対策を徹底してきたことの結果である。

学生生活への支援

- ・必ずカウンセリングが受けられるような体制づくりをしているのが最近の企業である。学校も学生に周知徹底し、自分でカウンセラーに話に行く態度を身に付けさせてほしい。「特別なことで隠れて行くことではない。カウンセリングに行くことは恥ずかしくない」という姿勢を学生時代から養わせることが大事。
- ・検査学科は学生会を発足している。学校として臨床検査学科と看護学科と2

つの学科で学生会を発足をさせる良い機会である。学科を分けず共有の場で学生同士お互い知り合うことが出来るので発足を提案する。

管理運営・財政

- ・看護学科の定員が増えたのでゆとりが出来たら良い。
- ・国からの補助金だけではなく、他の給付等考えられないか。授業料が高ければ学生は他へ行ってしまう。病院と連携し奨学金を給付していただくなど。

施設設備

- ・2、3、4号館をつなぐ通路に溝があり転倒の原因となるので、わかりやすいように目立つ色を付けると良い。
- ・女子トイレの増設は良いことである
- ・図書館司書を配置しているが、専門学校で図書館司書を置いている学校は少ない。司書がいて、研究がきちんとできる学校を学生は選ぶ。

教職員の育成

- ・臨床検査学科の評価が低いのは学会に行く余裕が教員にまだない状況だからである。徐々に研究活動をしていく環境づくりが大切。
- ・看護学科は教務主任以外の教員が研修会等に参加し、教務主任になる予定の教員が幹部の養成校に行けたことは良いことである。

広報・地域活動

- ・なぜ専門学校に入学する学生が少ないかという点、大学に行く学生が多いからである。小田原の看護専門学校ではWスクールを取り入れた。専門学校に入学し、通信制大学に行ける。3年間で卒業し国家資格を取り、働きながら星槎大学に行き頑張れば4年で卒業できる。大学の19.1%がWスクールに通っているとホームページで紹介していた。新たな発想であるので紹介する。

小袋委員

- ・二つの専門学校が一つの学校になり1年が経ち、自己点検・自己評価を行い発表できたことは素晴らしい。
- ・看護学科の定員が80名になり、定員充足に浦和学院高等学校から国際医療専門学校に多く受験ができるよう体制を整え、臨床検査学科への進学に向けて引き続き紹介していく。
- ・看護師国家試験3年連続100%合格は素晴らしいことであり高校生に紹介していく。臨床検査学科についても頑張っていたきたい。

教育課程・教育活動について

- ・浦和学院高校では2,700人在学しているが一人1台パソコンを与えている。3年間で自分のパソコンを作り、上級学校に進む形をとっている。高校でも

ICT教育をしており3年間経験している生徒が、社会人はICTリテラシーを身に付けて入学すると思う。マナーを守ることに苦慮しているが引き続き指導していきたいと思う。

- ・カウンセラーについて浦和学院高校では15年前から臨床心理士、学校心理士がおり、常駐の臨床心理士が3名から多い時で4名いた。生徒はもちろんのこと教員もカウンセラーからアドバイスをもらっている。このようになるまでには時間がかかったが、15年目になる。浦和学院高校には「カウンセリングを受けることは恥ずかしい」という考えはない。教職員も指導に役立っている。
- ・内部研修の受講はZOOMで行っているかとの質問があり、渡邊事務長より2022年は対面で行ったと回答した。
- ・高校では外部講師を7月に招き、経験年数でグループ分けを行いハラスメント研修を受講する予定であるため、共有ができればと思う。同じグループであるため浦和学院高校の中で出来ること、教職員の中で共有すること、生徒達がお世話になり、またこのような体制で協力が出来ればと思う。

石井委員

令和4年度看護師国家試験100%合格おめでとうございます。校長先生をはじめ教職員皆様のご努力と温かいご指導に卒業生として誇りに思う。

教育課程・教育活動について

新型コロナウイルスの影響が減少し臨地実習ができたことはとても良かった。看護の臨地実習は学内で学んだ知識、技術、体力の統合を図りつつ看護方法を習得する大切な過程である。学内で学んだものを実地にて検証し、より一層理解を深め、看護師として現場に立ってからも心の糧になる

入学・卒業対策について

看護師を目指した理由を調べたアンケートによると最も多いのが

- ・手に職をつけたいという経済的自立という考え37%
- ・身内、知り合いに看護師がいた、自身の通院・入院の経験

と続く。

看護師を目指す上で「看護系の大学と、看護専門学校はどちらが良いのか」が学生の最初の選択となる。どちらも看護師国家試験の受験資格を得るために必要な知識と技術を身に付ける場であるのは同じだが、修業年限、授業内容、取得単位数など異なる点がある。

看護専門学校は資格取得に必要な知識や技術を短い期間で身に付けるため、体感的に看護の技術と知識を習得する場所である。4年制の看護系大学よりも1年早く現場に入り、経験を積み、大学よりも学費が安く抑えられる。

専門学校は学習内容は座学より実技や実習が重視され、実習時間の1/3が現場教育の時間にあてられる。実践的なスキルが身に付き、看護師として働き始めた後でも早く現場に慣れることが出来る。大学よりも在学期間が短いので短期間で学習を進めなければならない。

経済的に問題のない学生は大学を選択すると思うが、看護師免許を取得することを第一に考えた場合専門学校が有益と考える。現在ICT化を導入し学生もより学習しやすく時間を有効に使える状況になっている。

入試相談会や、社会人向けの説明会を行うことで多くの方が国際医療専門学校に入学されることを願っている。

7) 総括

遠藤校長より、昨年は統合し1年目であり、組織づくりと教育基盤を固めていく1年であった。ハード面の改修、カリキュラム改正、ICT教育の推進、国家試験100%合格の維持が重大な課題であった。臨床検査学科においても合格率の実績を残すことを課題としてきた。昨年度より定員充足率9.2%増の75.5%、総学生数332名になったことは一定の評価と捉えている。

次年度に向け、学校全体の共通評価項目を抽出し両学科共に評価を行える状況になった。

今回数値の低かった、新カリキュラムの教育活動の実践、それに伴う授業研究、教職員の人材育成、学生支援の評価・結果を基に改善計画を策定して参りたい。

以上
文責 塩田